



▲鶴田公園（白川河岸 明午橋横）で憩う人々



▲ゴミと化した、不法投棄警告の立看板

部長登場

熊本県林務
観光部

部長 松下敏郎

「このころ三題」

高度経済成長の行き過ぎということがよく言われますが、都市においては身のまわりの緑が、一面にコンクリートの砂漠に変わり、農山村においては祖先伝来の山や川が傷だらけの姿をさらしている……。

このような生活環境に対する反省が国民の間によく芽生え、昨今「ふるさと」と「緑」の再建が叫ばれるようになりました。

緑を失うことは、ブルドーザのひと押しでまたたく間に終わりますが、緑を育てることは、長い年月と人間のたゆまない努力が必要なのです。生きている緑、特に樹木とか森林とかについて、今以上に、水や空気や人の心を養いはぐくむ



働き（公益的機能）や、木材その他の林産物を生み出す働き（経済的機能）の重要性が論じられました

されても、老樹大木や、良材を生む美林を、右から左に削り出すことはできません。熊本市の花畑公園にある、かの大楠は七百年の歳月を経て今日の姿になったものですし、一〇・五センチ角の柱材をとることが出来る杉の木は植林以来少くとも三十年間にわたる保育の結晶なのです。

今、私は、保育と申しました。まさに木を育てることは、人間を育てることと同じです。植林に始まり、施肥、下刈、適切な間伐と、母親がみどり子を養育するように、愛情をもって保育してはじめて木は育つものです。心がなければ、決して緑は育たないのです。

熊本県では、昭和四十七年から、美しい熊本づくりを呼びかけてまいりました。足かけ五年、県民多数の努力が実って、国道県道などの沿線をはじめ住宅地、公共用地などあちこちに花と緑が多くなり、また、だんだんと花を植える樹を育てる有志の方々がふえてきました。

ところが、せっかくこのように郷土の美化がすすんでいる一方で、「熊本は汚い」ということがとり沙汰されるのも事実です。なるほど、熊本市の街なかを歩きますと主な交差点やバス停留所の傍など、灰皿や屑籠が備えられているにもかかわらず、すぐそばに煙草の吸い殻や空き罐が捨てられていたり、ひどいのは「美しい熊本づくり運動」のシンボル花壇の草花の中にまで投げ込まれてい

ます。また、車で国道や県道を走るとき、道端に空き罐がころがり、交差点で信号待ちをするとき、きまって煙草の吸い殻が一面に散らばっているのを、皆さんもお気づきのことと思います。本県が誇る阿蘇山や菊池渓谷でも、シーズンともなれば、ごみ、空き罐、煙草の吸い殻の始末が、管理に当たる人達の頭痛の種になるのが毎年の例なのです。

そこで、去る三月に開催された第三回美しい熊本づくり推進県民大会で、「ごみや吸い殻を決して捨てない、散らさない」という宣言が決議され、今年度の中心課題として県民運動を展開することになりました。考えてみますと、「汚さない、散らさない」ということは、根本的には県民、県外者も含めて一人一人の心がけによらなければ実現できないことですし、また、誰にとっても明日とは言わず今日から実践できることでもありません。少くとも県民各位一人のこらず、「捨てないゴミと吸い殻を、築こう美しい熊本」をモットーに、この運動を理解していただきご協力願いたいものです。

昨年の三月、新幹線が博多駅まで開通して以来、九州入りをするお客は、今年三月までの一年間に三八%ふえ、また熊本県内各地における観光客も、昭和五十年は前年にくらべて八・二%増加して、二千三百万人になったと推定されており

ます。

ところが、熊本に旅行した観光客の中から、「不愉快な思いをした、二度と行きたくないし知人にもそう教えてやるつもりだ」というような投書が、わざわざ県外から地元新聞に寄せられているのを見うけます。もちろん一方では、「熊本の人々の親切さによって嬉しかった」という感謝の気持ちを伝えてくるものもあるわけですが、少くとも、住みよい郷土、美しい熊本をつくらうとせっかく皆が努めている中で、一部にせよ県外から訪れた遠来の客に対して不愉快な感じを与える人がいたので、九俣の功を一箕(き)に欠くというべきでしょう。

このため県では、観光連盟とともに親切運動を推進することとして、宿泊施設、交通機関などの観光客に対する接遇者を中心に広めていきたいと考えておりますが、事は、単に観光客のみに対する問題ではありません。

「親切にしよう」ということは、「汚さない、散らさない」ということと同様、何よりもまず、そこに住み、暮らしている人々自身のためのものであり、また、そこに住み、暮らしている人々の心の問題です。

「親切にしよう」という心、「汚さない、散らさない」心こそが、郷土の豊かな緑を育て、美しい私達の熊本をつくるものではないでしょうか。

きざず「美しい熊本」を

――まずは、ゴミを捨てないことから――

現在、県下各地の環境美化運動は、除々にではありますが高揚、定着をみせ始めており、既に多くの個人、団体の積極参加があります。

しかしながら、一方においては相変わらずゴミの投げ捨ては後を断ちません。

一例として、一人の老人の花木に対する温い愛情とひたむきな努力は、鶴田公園（写真上）をつくりあげ、市民に憩いの場を提供しました。反対に心ない人の行為は道路にガレキの山を築き人の目をそむかせます。（写真下）

誰れもが一樣にこの運動に参加することはできませんが、私たち皆んなは、まず第一段階として「ゴミを捨てない」ということから美しい郷土づくりに取り組みたいものです。